



工高タイムス

北海道旭川工業
高等学校新聞局

〒078-8804
北海道旭川市緑が丘
東4条1丁目1-1

発行人(局長)
稲留 駿斗
(電気科3年)

新聞部

新聞を作る仲間と交流 年間紙面審査賞で優秀賞に

新聞局は7月28～30日に秋田県潟上市市民センターかたりあん・天王館で行なわれた第50回全国高等学校総合文化祭あきた大会新聞部門に参加した。全国から133校、455人が集まった。大会テーマは「輝く稲穂に廻らす想い／おがれ若人美の国秋田に今集え」。小寺侑喜君(化2)が取材した内容を紹介する。



優秀賞の賞状を受け取る小寺君(左)

大会初日は15時から交流会で秋田県の方言や歴史、自然に関するクイズのカードゲームでアイスブレイクをした。15時50分から富山県の高岡第一高等学校の長丸和生先生の「交流新聞作成と取材活動のポイント」の講話を聞いた。16時20分から班別編集会議を行ない、5～6人で一つの班を作り、レイアウトや役割分担、取材内容を話し合った。

2日目は開会式と全国高等学校新聞年間紙面審査賞の表彰式が行なわれ、旭工は優秀賞を受賞した。10時10分から班別編集会議をし、11時20分から15時20分に48班が12コースに分かれて取材をした。取材後、潟上市市民センターかたりあん・天王館へ戻り18時まで新聞作成をした。



来館者を迎える鬼の面を付けたなまはげの人形

Cコース

なまはげは鬼ではなく来訪神 若者減少で担い手不足に

Cコースは真山神社となまはげ館、男鹿真山伝承館、テノハ男鹿取材した。なまはげは大みそかに男鹿半島で行なわれている伝統行事で「怠け者はいねがし、泣き子はいねがし」と地域の家を回る姿は印象的だ。なまはげは鬼ではなく山の神の使いで厄を追い払い、豊作豊漁、無病息災、家内安全を約束する来訪神である。

真山神社は男鹿市の真山にある神社で山岳信仰の霊場として信仰されている。2月の「なまはげ柴灯まつり」は神事の紫灯祭と民俗行事のなまはげを組み合わせて1964年から始まった。欄宜(ごんねぎ)の高森博光さんは「お祓いを受けた面を授かった若者たちが神の使いとして迫力ある舞を披露する」と話した。

なまはげ館には面や衣装などが展示されている。なまはげの赤は魔除け、黒は夜の闇、白は雪を表している」と説明した。

なまはげ館には面や衣装などが展示されている。なまはげの赤は魔除け、黒は夜の闇、白は雪を表している」と説明した。

なまはげ館には面や衣装などが展示されている。なまはげの赤は魔除け、黒は夜の闇、白は雪を表している」と説明した。

研修取材

子ども用の竿燈を体験 防火対策で屋根にかめ

秋田市民族芸能伝承館(ねぶり流し館)は8月に行われている「秋田竿燈まつり」など秋田の祭の展示と竿燈の演技が見られる。竹竿にたくさんの提灯を取り付けた竿燈を額や肩、腰などで支え、バランスを取りながら演技をする。



高さ12mの竿燈を使つての演技

や邪気を払うための儀式が力比べから技を披露する祭りへと変わっていった。竿燈には幼若・小若・中若・大若の4種類あり、大若は高さが約12mで重さが約50キロ。竿燈会会員の演技を見学した後、生徒は重さ5kgの幼若を手のひらに乗せてバランスをとった。竿燈を安定させる技術が求められる。まつりでは五つの基本技などが披露され、竿燈を高く掲げる姿が見どころだ。

立館
美術
秋田
美術

藤田嗣治の作品を展示

90年前の生活や文化を描く

秋田県立美術館では秋田の資産家・平野政吉が収集した

作品を中心に展示している。1934年に東京の美術展で

平野は藤田嗣治(レオナルド・フジタ)と会い、交流が始まった。藤田が1937年に平野家の米蔵で制作した「秋田の行事」は縦3・65m、横20・5mの大壁画で、秋田の祭や人々の暮らしが描かれている。作品の右側には竿燈まつり、ぼんてんまつりなどのにぎやかな様子、左側には冬に雪の中で暮らす人々の日常が描かれ、90年前の秋田の生活や文化を表現している。

とも多かったが、顧問の先生や全国から集まった班員に支えてもらい、3日間を無事にやり遂げることができた。また、秋田で過ごした3日間に比内地鶏の親子丼や稲庭うどん、ホテルの近く中華料理店に行つて夕食をとった。どれもとてもおいしかった。大変なことも多かったが、おいしい秋田の料理を食べられたことも全国大会で楽しかったことの一つだ。(化2小寺)



工具箱

防災①
特集
水害に備える

十勝岳噴火 大正泥流から100年
残雪を溶かし大規模に
硫黄や硫酸を含んだ堆積物

新聞局では工高タイムス第508号で旭川市と旭工の防災対策について特集を組んだ。その後も地震や水害などが多発している。上富良野町は100年前の泥流被害を受け、富良野川流域の町民を含めた避難訓練を実施している。特集防災の1回目は大正泥流について歴史を振り返る。

新聞局は夏休み中の8月18日に上富良野町の郷土館、役場、土の館、被災者の子孫の佐川泰正さん取材した。郷土館は入植から開拓の歴史、十勝岳噴火災害、現在の

農業について展示している。十勝岳は1926(大正15)年、62年、88〜89年に大きな噴火があり、30〜40年間隔で起きている。特に1926年5月24日には「山が無くなっ

た」と言われるほどの火口丘の崩壊が起こり、噴火で高温の噴出物と崩壊物が残雪を溶かして大規模な泥流となり富良野川と美瑛川つたいに流れ、川沿いの木々や土石、家屋を巻き込みながら田畑を埋め、25km離れた上富良野の市街地近くまで約25分到達した。上富良野で137人、美瑛で7人が犠牲となった。大正泥



土の館にある上富良野町草分地区のモノリス(土壌標本)。幅1m×長さ4mで2〜3層目の2mが泥流を含む土層である。

土の館
今でも石から
硫化水素臭が

国内外の農地からモノリス(土壌標本)を集めた土の博

流と名づけられた災害である。泥流堆積物は平均60cmで上流部では6mにもなった。堆積物は硫黄や硫酸を含む強い酸性で農業には適さないため、堆積物が30cm以下の所は泥を取り除き、それ以上の所は他から土を入れる客土をした。2度目の開拓と言われた。

上富良野町教育委員会教育振興課社会教育班主査の佐藤根祥太さんは「復興には10年以上かかると言われ、多大な費用や復興の保証がないことなどから反対する人もいた」と説明。復興の指揮をとった吉田貞次郎村長と反対派が和解するまで2年以上かかった。その間も国や道の財政支援で復興事業は行なわれた。



被害について話す佐川さん

祖母が父をおぶって避難
数字ではなく紙芝居で

佐川泰正さん(73)の父は1歳のときに大正泥流にあった。佐川さんは「祖母が赤ちゃんの父をおぶって高台に避難

したので生き残ることができた」と話し、祖母から「ほりとカスで泥流は見えなかつたが、流木がとんぼ返りのように縦に回転しながら流れていた」と聞いたという。馬を助けようとして、家財道具を取りに行ったりして亡くなる人もいた。泥流に巻き込まれた遺体に傷がなかったり、子どもを抱きかかえた人の下

半身がない遺体もあった。「水害のときはとにかく高い所に逃げる。災害のときに自分はどうするか、家族はどうするか、能動的に考えておくことが必要だ」と話す。

佐川さんが理事長を務めるNPO法人環境ボランティア野山人(のやまびと)ではトップパスの活動の他に、祖母のいとこである佐川亀蔵さんの手記と聞き取りをもとに紙芝居を作製し、被害の数字ではなく人々の心に訴える「心の防災」として泥流による苦しみや恐ろしさを発信する「語り部」の活動を行なっている。

紙芝居

十勝岳爆発
の思い出①

被災者の手記をもとに
泥流被害を後世に伝える

佐川泰正さん(73)が理事長を務めるNPO法人環境ボランティア野山人(のやまびと)では大正泥流の被害を後世に伝えるために紙芝居を作製し、語り部の活動をしている。紙芝居のもととなった被災者の手記は上富良野町郷土をさぐる会が1981年に発行した機関紙「郷土をさぐる」第1号に泰正さんの祖母のいとこに当たる佐川亀蔵さんが寄稿したものである。それに泰正さんが祖母や亀蔵さんから聞いた話などを加えて紙芝居としている。亀蔵さんは満16

歳の時に被災している。紙芝居の絵は同法人でツアーガイドをしている井上文雄さん(68)が描いた。工高タイムスで紹介するために紙芝居の原稿を泰正さんから提供してもらった。新聞局では原稿を常用漢字またはひらがなに直し、見出しをつけた。また、亀蔵さんの手記の部分は「教科書体」で表し、原稿に手を加えた部分は「ゴシック体」で表した。

◆ ◆
十勝岳爆発の思い出
大雪山十勝岳連邦は、今の姿に

◆ ◆
今日の日新ダムのある沢に2人の弟と3人で8時半頃家を出ました。その頃は、山の方はガスがかかって十勝岳は見えませんでした。山鳴りはいつもよりひどかった。父は「山が爆発するかも知れんぞ」と言っていたのを言うことを聞かずに出かけてしまいました。

父は宮城で水害を経験
父が四ツか、五ツの頃、宮城県

20日前から噴火の予兆
私たちが山の鳴動を初めて聞いたのは5月4日の日でした。その日、佐川団体の人は総員道路普請(作業)に出ていました。お昼ちよつ